特別講演

ランドスケープの方法～土木家への提案～

講演者
東京農業大学名誉教授　造園家
進士　五十八 氏

プロフィール
1969 年、東京農業大学造園学科卒業。1986 年、農学博士。1987 年、東京農業大学教授。1989 年、日本造園学会賞受賞。1993 年、東京農業大学総合研究所長。1995 年、東京農業大学農学部長。1998 年、東京農業大学地域環境科学部長。1999 年から 2005 年、東京農業大学学長。2005 年、日本学術会議会員（環境学委員長）。2006 年、日本農学賞・読売農学賞受賞。2007 年、紫綬褒章受章。2007 年、NPO 法人 美し国づくり協会理事長。2008 年、公益社団法人 大日本農会副会長。2010 年東京農業大学名誉教授。2011 年、一般社団法人 農あるくらし研究会会長。

はじめに

私は造園家でして、皆さんのお役に立てるお話ができるか、少し不安ですが、造園家がどう考えているかをご理解いただき、提案として受け取っていただければと思います。

東京農業大学［以下、農大］は 2011 年に 120 周年を迎えました。かつては農学だけの単科大学でしたが、私の学長時代までに、3 キャンパス 21 学科になりました。狭い意味での農学、例えば作物学や園芸学、畜産学だけでしたら、21 もの学科にはなりませんし、今の大学の維持は困難です。そのため生物系のベーシックなサイエンスを基にしながら社会のニーズに応えるスタンスで、視野を広げ、例えばバイオサイエンス学科や国際バイオビジネス学科などを創設してきました。これに対して、規模が拡大して、困ったものだと言う方もいます。

しかし、農学は応用の学問ですから、社会や地域のニーズに応えて変革しつづけてこそ存在意義があるわけです。普遍的一般解を追求する純粋科学ではないのでノーベル農学賞はありえませんし、土木学も同様でしょう。応用分野では地域を限定して掘り下げる仕事をしています。

私の専門である造園は、文明より文化を扱う。古代エジプトから西洋また、中国の庭園まで 3000 年の歴史があります。しかしイタリア式庭園、スペイン式庭園、あるいは近世のイギリス風景式庭園、すべての様式に国や地方名がついています。これが芸術運動でしたら、バロック、印象派などある種の思想集団ができます。それに対して造園はローカルなんです。ノーベル賞の対象である普遍性を追求する医学や物理学ではない。ローカルには普遍的ではないことがもっとも重要で、普遍化しすぎると地域の要求や造園に求める文化性に応えられなくなってしまいます。

皆様の現代土木は、あまりにも普遍化し過ぎたと思います。日本の隅々まで同じような基準をつくり、それに基づいて進めるのは、造園というローカルな立場から見ると、やり過ぎではないかと感じています。もっとも、だからこそ世界に進出できているのでしょうけれど。

「安全」と「安心」、市民感覚でのギャップ

昨日、農大の後輩の教授が来て、21 学科に加えて 2014 年から食品安全学科をつくると自慢していました。お土産を持ってきましたが、その食品にいろいろな人工甘味料や保存剤が入っていました。これでは「食品安全学科」でしかなく、「食品安心学科」にはならない。

研究者は基準値を設けて、その基準以内の添加物であれば問題ないと考えます。かつて農薬問題が激しく批判されたときに、その議論に私は参加したことがあります。その際、農薬の研究

者が大学や研究室に多くいて、農薬の絶対安全性をしきりに言っていました。私は化学会社の研究所にいた時期があり、そのころは水銀を平気で扱っていました。他にもアルデヒド系の有害物質も実験で平気で扱っていました。こうした危険な物質を扱うことにプロは慣れてしまい、鈍感になりがちです。

高学歴社会、高齢社会というのは、専門家がやっているから、専門家に任せれば安心、とはいかなくて市民や国民自らが判断しチョイスする非常にセンシティブな社会です。

これが強烈に表れたのが、2011年の東日本大震災以降です。特に原子力問題への反発が大きかったのですが、土木に対してもそうだと私は思います。防潮堤を今までの何倍に高くすべきかというだけでは納得できません。必要な高さは地域によって違うはずですし、海岸林との組み合わせや街の再建とワンセットでトータルデザインを提案しなければ納得されないでしょう。「安全であればいい」は、専門家の言い分。市民や国民は「安心」を求めています。

本講演での私の最大のメッセージは、「安全の土木から安心の土木へ」です。先ほどの国土技術研究センターが設立40年というお話の中で、いろいろ戸惑った時期があるというのは、その安全と安心のギャップ、市民意識や国民意識と専門家とのギャップだったのではないかと思います。専門家は専門知識に基づいたしっかりした説明をする責任があると思います。

大石さんの本がすばらしいのは、この点です。日本の国土の特性をデータで語っておられる。読んでいない方はぜひ読んでいただきたい。データをしっかり示していけば、公共事業は景気や建設業者のためだという議論は起こらないはずです。

ランドスケープと造園－landscape architectureの翻訳語が造園

私の専門はランドスケープ・アーキテクチュアという、建設界ではマイナーな存在です。「ランドスケープ」より「造園」が使われてきました。皆さんは、ランドスケープと造園は別と思われるかもしれませんが、私たちはまったく同義でつかっています。まずは言葉について。

Landscape architectureは、150年くらい前にできた新しい言葉です。landscape という言葉そのものは古くから風景画の世界で使われておりましたが、それにarchitecture（建築）を付けて新しい職能を確立しようとしたのが、フレデリック・ロー・オルムステッド［Frederick Law Olmsted 1822-1903］です。彼はニューヨークのセントラルパークを設計しましたが、その際、従来のガーデナーとは異なる性格の仕事とはっきり自覚して、landscape architectsという新しい職能を名乗ります。ドイツ語ではラントシャフトLandschaft、フランスではペイザージュpaysageです。

日本では、architecture（建築学）は家をつくる学、造家学としてスタートしました。東京駅を設計した辰野金吾［1854-1919］は造家学者でした。architectureに家を当てたのに対して、landscape architectureには園を当てて造園学としました。

しかし造家学は、十数年で建築学に名前を変えます。改名については土木界でも随分議論があり、本質論から変えなくていいという意見もあれば、変えたほうが受け入れられるのではという意見もありました。

建築界はさっさと改名し、丹下健三［1913-2005］や黒川紀章［1934-2007］のようなスターを誕生させました。

韓国ではlandscape architectureをそのまま訳し造景学としたわけです。日本でも初期、景園学と呼んだ人もいました。いま中国では風景園林という言葉を使っています。風景はランドスケープですし、園林は昔から造園技術を意味します。中国では公共事業の公園緑地部門を園林局といいます。

これで「ランドスケープ」も「造園」も同じだと理解されたと思います。

都市文明の人工化とバランスをとるためのランドスケープ

landscape architectureという言葉をつくったオルムステッドは、都市の無方針な成長と産業化による環境の人工化が問題になるだろうという文明論を展開しました。そして、問題解決を果すべき職能としてlandscape architectsを位置づけました。

産業革命によって工業が盛んになって、都市がどんどん広がって肥大化すると環境の人工化が進む。それは生物としての人間にとって大問題だと感じた彼は感受性が高かったのでしょう。ニューヨークの人口がまだ60万だった150年前に、800 m × 4000 mの320haの公園（セントラルパーク）を設計し、初代所長として完成させるわけです。

当時のニューヨークは人口もわずかで、産業化による環境の人工化は微々たるものです。人がたくさん住んでい

たのは南のウォール街ぐらい。

マンハッタンの北西部、現在のセントラルパーク周辺は荒れ地でした。貯水池がすでにあったのですが、周りは荒れてゴミ捨て場になっていました。そこをイブニングポストの新聞記者で主筆、ブライアント［William Cullen Bryant　1794-1878］が、そういった場所にこれからは公園をつくるべきだと提案します。

オルムステッド自身もイギリスに旅行するなどいろいろな経歴を持っている人でした。例えば赤十字運動や南北戦争、奴隷解放と、いろいろに参加し、社会性を持っている農業技術者でした。彼は、当時の状況、都市の無方針な成長や産業化による人工化が問題だとして、それを緑地でバランスさせようとしました。

彼はパストラル［pastorale　田園］という言い方をしました。田園によって救われるという考え方で、キリスト教的な一面もあると思います。しかし、大局的にみれば、人間とはそういうものです。

ベルサイユ宮殿を造ったのがルイ14世［Louis XIV　1638-1715］、孫のルイ16世［Louis XVI　1754-93］からもらったプチトリアノン宮に付属する小さな庭園にアモーという農村風景を再現し自分用の牧場を開いたのは王妃マリー・アントワネット［Marie Antoinette　1755-1793］です。彼女は召し使いたちと乳をしぼったり、チーズをつくったりして田園暮らしをしています。彼女は浮気ばかりして遊んでいたことにされていますが、まさしく田園趣味の人でした。

水戸光圀［徳川光圀　1628-1700］は晩年、蓮池があり、山が背後にある背山隣水の地を桃源郷になぞらえ、そこに西山荘を営み、晴耕雨読の生活を楽しんでいます。桃花源の記の陶淵明［陶淵明　365-427］はじめ中国の詩人たちも同じです。人生の最後は田園に戻るわけです。そういう意味で、パストラルがテーマの公園が、セントラルパークです。

のちにA. ファイン［Albert Fein］はオルムステッドの考えを斟酌して、landscape architectsに不可欠の能力として、scientific farmer（科学的な百姓）とsocial planner（社会計画家）の2つをあげています。簡単に言えば、scientific farmerとは自然のことを科学的によく知っていること、social plannerとは人間と、社会はいかにあるべきかを考え、社会的ニーズを実現する能力があることです。

オルムステッドが提唱したランドスケープには、人間も生物の一員であるとする考えがベースにあります。そして、都市が人工化していく20世紀文明に対して警戒心を持ち、この人工化とバランスをとるために、ランドスケープという、土地や自然に注目をしなければいけないと強く考えたのです。

地域で異なる造園のデザイン―中近東は噴水、東洋は滝

「ランドスケープ」と「造園」は、意味は同じですが、イメージは少し違うでしょう。造園は古代エジプト以来ずっと人間の歴史とともに、世界中にあります。しかも、先述のように各国の国名・地名を冠したガーデンスタイルができています。それはまさに造園がその土地の地域性を踏まえて行われたことをあらわしています。

砂漠地帯の造園、例えば噴水は砂漠の中のオアシスのわき水に由来するので、噴き上げるわけです。昔はポンプアップしたりできませんでした。中近東のイスラム庭園やペルシャ庭園のパティオの噴水は、砂漠のオアシスが原風景です。

一方、モンスーンの東洋では雨が降って、滝となって落ちます。土木界の先達デ・レーケ（Johannis de Rijke　1842-1913）が日本の川は滝であると言いました。重力に則して上から下に落ちる。これが日本の水の原風景です。

このようにそれぞれの地域に、その地域ならではのランドスケープスタイル、ガーデンスタイルができてくるわけです。

それから、時代によって誰のためのガーデンか違います。エジプトはじめ古代は、神殿もしくは国王や皇帝に奉仕するのが造園（gardening）でした。中世には、地方の領主や貴族のカントリーハウスのための庭園となります。ランドスケープ・ガーデニング（landscape　gardening）といいます。

周りを囲って一つのミクロコスモスをつくるガーデンから、視野を外に広げ外を取り込んだランドスケープ・ガーデニングへ移行したわけです。

そして150年ほど前から、オルムステッドが提唱したランドスケープ・アーキテクチュア（landscape architecture）へすすみ、市民に奉仕する近代造園技術を目指します。土木技術がミリタリーからシビルエンジニアリング（civil engineering）に向かっていくのと同じではないでしょうか。

造園の本質は ガーデン（garden）にあり

このように主体は神仏、皇帝、貴族、市民へと変化しますが、造園の本質はガーデンにあります。ガーデン（garden）はガードする、防衛する、守る、安全にするという意味の gan と、エデンの園の eden が合わさった言葉です。エデンには、悦びとか、愉しみという意味、心からの悦びです。

動物学者のデズモンド・モリス［Desmond Morris］は、庭園とは囲まれた安全な世界、動物が自分の命を守るようにガードされている場所。そして、庭園の水、魚や鳥、果実、それは全て食料の象徴だと言っています。Eden や Garden は、J.Appleton のいう、「生きられる景観」ということです。

安全で、しかも食料、水があって生きていける空間。これは生物としての人間が生きられる基本条件を満たす場所です。Eden は理想境を表す言葉になっているのでキリスト教世界におけるエデンの園となります。仏教における極楽浄土も同意です。古代ギリシャではアルカディアと呼び、中国人は桃源郷と言いました。ハワード［Ebenezer Howard　1850-1928］は garden city［田園都市］を目指したわけです。

日本の庭園と造園は、 地場材・自然材で地域らしさを醸します

次に、スケールの小さい庭園の話をします。庭園は美しさを洗練させた造園の一領域ですが、その中で日本庭園は独特の発達の仕方をしました。

囲って敵から守って空間を独立させるのは同じですが、その中の理想像を日本では神仏世界をモデルにしたわけです。古代日本にはアニミズムがあって、自然の石や木に神を感じ、磐境、磐座、神籬を祀りました。

さて、土木分野の方にお聞きします。自然の素材を、野蛮で遅れていると思いますか。それは、神やシンパシーを感じる人間にとってすごく大事で、意味ある材料だと思いますか。コンクリートは万能の素材で、形も強度も自由になります。すべてのものに応用できるという意味では確かに文明的です。しかし、文化の面から見るとどうでしょうか。

そこの土地独自の素材は、コンクリートとは別の味を持っています。日本には京都のように変成岩帯が発達していて、味わい深い見事な庭石が産出します。盆石という趣味さえあり、石の中の模様を菊の花にたとえたりするわけです。これは強度としての素材ではなく、美の対象としての石です。

また御影石。瀬戸内海地方の花崗岩地帯は御影石とマサ土の白砂青松の風景が見事です。岡山後楽園は花崗岩の庭石と間知石がなければ成り立ちません。後楽園と桂離宮では雰囲気から石のつかい方まですべて違う。同じ時代の庭園でも地方によって全く異なります。

岡山後楽園は津田永忠［1640-1705 か 1707］という土木家が造成しました。護岸を間知石で積んだ見事な水工です。起伏がない地形の中に、水の流れを一筆書きで全園を巡らしています。このように土地条件によって異なる手法や自然材を生かすのが日本庭園の特徴です。

さびの美とは、 歳をとる美しさ、時間がたつ美しさ

日本庭園の特徴のもう一つは時間（歴史）の重視です。わび、さびという言葉。美学者はいろいろ解釈していますが、私は「時間の美」すなわち「エイジング、Aging の美」だと考えています。建設業の多くは現在つくりあげて機能を提供した完成時が最高で、あとは劣化していくという考えです。そのため、アンチエイジングという概念さえ出ていますが、私はそう思っていません。むしろ時間の経過で風化するものも美と感じる美意識があると言いたいのです。

石は風化して苔むすと、味わいが出ます。御影石の中の鉄分が表に出て、表面を酸化鉄で覆った味わいが鞍馬石という庭石の価値です。一流の料亭で見られるように、沓脱石や飛び石などしっとりとした黒に近い茶色で、本当に味わいの深い色が出ていて、これを「さび（然び）た味」といいます。鉄の錆びとある意味では同じです。銅は緑青になります。それぞれ時間が経つと酸化して、味わいを深くしていくのです。

ものの本質が時間の経過とともに表に現れることをしか（然）び。音変してさ（然）びとなります。これが私の言う「さびの美」です。花崗岩の中の鉄分が表面に出て酸化して膜をつくり、大谷石は風化してミソ［黒茶の斑点］の部分が空洞化してぼろぼろになります。それはそれでいいという美意識や雰囲気を、例えば日本民芸館に行くと皆さんも納得できるでしょう。

材料は、強度だけが重要ということではなく、変化や劣化も味わいとして大事だということです。

われわれ自身がそうです。私も70歳近くなって、しわやしみが出ています。これも「さびの美」だと思えば魅力のひとつにできます。生き物は成長過程で、体力は落ちるが代わりに記憶力や協調性は伸びるといったように、世代で魅力のポイントが変化していきます。それを生理的なパワーだけで評価するのはナンセンスです。

毛沢東［1893-1976］が「老中青三結合」を唱えましたが、老人には老人の、中年には中年の、青年には青年のよさがあります。さびの美は老人の美なんです。

能舞台に描かれている影向松からは、風雨や風雪に耐え、どっしりと根を張った時間の美を感じます。そこに神が降臨するのです。正月には新鮮な生命力を感じようと、真っすぐ伸びた若松をシンメトリ［左右対称］に玄関口に立てます。元気いっぱいの若者の美はシンメトリです。でも、老人のはバランスの美です。

ものは成長し、あるいは年を経ることで変化していく。その変化の味わいがまた別の価値を生みます。日本庭園では、それを最大限に尊重しています。空間の美ばかりを追いかけるデザイナーの世界とはひと味違う時間美を大切にします。

私は、さびの美を外国人にはエイジング、agingの美、歳をとることの美しさ、時間がたつことで醸される美しさと説明します。イギリス人はそれをウェザード、weatheredの美と言います。白木の木材が風雨にさらされ、真っ白だったのが灰色がかっていくのをweatheredの美といいます。彼らも時間の美を感じているようです。

ただ、日本は高温多湿な気候なので、より時間の美が加わりやすい環境です。例えば安い石灯籠も、米のとぎ汁をかけておくと間もなく苔が生え、何十年もたった灯籠に見えます。灯籠の笠のわらび手をわざと割って苔を付けると、何百年もたったように感じます。時間美の商品化技法です。テレビ番組の「開運！なんでも鑑定団」も同じAgingの美を競っているのです。

「景観十年風景百年風土千年」は、土木工学の竹林征三さんが提案している言葉です。似た言葉が、中国には昔からあって「樹木十年樹林百年」とあります。戦後日本は時間でものを見るという観点が相当欠けてきたと思います。長期的展望を持って国土をどうするのか考える時間感覚を持ちたいものです。

これは紛れもなく選挙のせいだと私は思っています。4年に1回、場合によってはもっと短期に解散するわけで、政治家もマスコミも長期的展望を避けて目先の話題をとりあげるからです。

日本の芸は本来は時間、歳をとったひとの凄さを追求したものです。私は学生時代、詩吟部に入りました。新入生は若くていい声なのに、みんなまず喉を嗄らさせるんです。大声をあげて、のどを傷ませ、年寄りの声にします。そうして初めて味のある声になっていくんです。これも日本文化の一つです。時間の変化、移ろいを味わおうとする傾向も一般的です。新緑、深緑、紅葉、落葉に敏感です。

桂離宮と庭園―洪水対策のための竹林と竹垣

桂離宮の中央には古書院、中書院、新御殿と御殿が並び、その東側に池があります。敷地の東側を流れるのは桂川です。その上流は保津川で、嵐山では大堰川、そして桂川となり、淀川に入ります（写真1）。

写真1　竹林で囲まれた桂川畔の桂離宮

注目していただきたいのは、桂離宮の桂川と接する周辺が、ほとんど竹林であることです。今は堤防で守られていますが、かつてこの一帯は洪水常襲地帯でした。そのため、この竹林は水制工だったと私は思います。

桂離宮は八条宮智仁親王［1579-1629］が別荘として造営に着手しました。彼は初め、秀吉の養子になりましたが、秀吉に実子が生まれたことから、八条宮家が創設され、その初代となりました。

立地は、月の名所の桂の里で最高なのですが、造営にあたって洪水からどうやって守るか考えざるを得ません。一つは、生きた竹を使った垣［桂垣］（笹垣）で、水がぶつかっても、その強烈な勢いをそぐようにしました。この笹垣があるのは桂離宮だけです。内側は写真2のようになっています。

写真2　桂離宮の笹垣の裏側

竹は鉈を入れても、繊維はそのまま生きています。この竹の性質をうまく利用し、先端の穂や葉の部分を編み込んで竹垣にすると、美しさと同時に、水の勢いを治める役目も果たします。この竹垣が川沿いにずっと続いてるわけです。

次は高床の御殿で、水屋のように高床にして洪水に備えているわけです。洪水来襲には先ず竹垣によって水の勢いを止め、ひたひた来る水につかってもいい高床式になっている。実際そのように機能した証拠として、茶室の笑意軒の壁に細いしみの線が残っており、間違いなくここまで水が上がっていたことがわかります。美しい建築の典型である桂離宮の景は、洪水対策という用を十分に考えていたのです。

西湖―洪水対策の浚渫事業を美しい風景づくりに昇華

次は中国の造園についてです。蘇州には世界文化遺産になった名園がたくさんあります。もう一つ名所が集まっている世界文化遺産が、南宋時代に臨安と呼ばれる都だった杭州です。城壁があり、その外の自然と湖水が、杭州の西に当たることで西湖と呼ばれます。はげ山に囲まれているので、雨が降ると湖には泥が入ります。そのため、この湖の底は絶えず上がって、少し雨が降ると洪水になります。地方長官として赴任した白楽天［白居易　772-846］や蘇東坡［蘇軾　1037-1101］の仕事は、この西湖の浚渫事業でした。

日本では公共事業で洪水対策を各地で進めていますが、洪水対策だけに終わっていると思います。西湖で私がすごいと思うのは、それで終わらせず美しい風景づくりにつなげている点です。浚渫した泥を岸辺まで船で運んで埋立ると時間がかかります。だから発生した場所近くで泥を固め、堤や島にする。蘇東坡は後、蘇堤とよばれる堤をつくります。その上は通れるようになっていて湖の対岸をつなぐバイパスとなっています。蘇堤は約１年で完成させています。白堤は孤山という自然の島とをつなぐ堤ですが、途中に断橋という橋を架けています。

こうして杭州西湖の湖中、湖辺に次々人手が加わり、ついに美しい風景ができていきました。洪水対策のための浚渫事業が契機ですが、併せて交通対策のバイパスになるように堤をつくり、堤に木を植えて緑化対策もしている。内水面漁業のための舟が動けるよう架橋し、周囲の丘の上には景観対策で塔を立てる等します。このようにいろいろな観点から多面的に事業を進めることにより、今では年に 7,000 万人の観光客を集める世界的なリゾートになり、2011 年に世界文化遺産にもなりました。

その西湖景観のベストテンが、西湖十景です。その一つ、夕日の風景がいい雷峰の夕照には雷峰塔が建っています。また、三潭印月は、湖の中に島があり、その島の中に湖があるので湖中島在り、島中湖在りと言っています。浚渫の泥土をドーナツ状に捨てて出来ただけですが、そうやって一つずつ絵になる風景をつくっていきます。そうなると、画家が絵を描き、詩人が詩を詠んで、全国的に有名な美しい風景となります。ついに西湖を、清の皇帝、康熙帝［1654-1722］や乾隆帝［1711-1799］が北京からわざわざ見に来るほどになりました。

そうすると日本も西湖をまねして庭園をつくります。例えば旧芝離宮庭園。大久保忠朝［1632-1712］の庭、楽寿園が元ですが、ここにも西湖十景の西湖堤がつくられます。小石川の後楽園にも、広島の縮景園にも、紀州和歌浦の養翠園に西湖堤ができます。江戸城にあった西湖之間という部屋には、西湖風景が描かれていました。白楽天の詩集である白氏文集は全部日本に伝わっていましたし、西湖図志など絵画集も数多く輸入され、江戸時代の大名の教養になっていました。岩国の錦帯橋も西湖十景の蘇堤の橋をモチーフにしています。

環境のよさを五感で受け止める八景式・十景式風景観

西湖十景のひとつ、三潭印月の潭は深いという意味ですが、湖水の深さは平均で 2 mもありません。雨が降るとあふれるので、湖底の泥を常に浚渫をしなければならなかったわけです。三潭印月も月がテーマですし平湖秋月も、秋の月を眺める名所です。

西湖十景は、蘇堤春暁、断橋残雪、三潭印月、南屏晩鐘、雷峰夕照、曲院風荷、柳浪聞鶯、花港観魚、平湖秋月、双峰插雲の 10 カ所です。

南屏晩鐘は、南屏山の麓にある浄慈寺（浄慈禅寺）の鐘の音がテーマです。曹洞宗の開祖、道元が修行したお寺です。この寺の鐘は［清の時代に］焼失しますが、［1986 年に］永平寺の信者たちが新しい鐘を寄付しました。

十景とか八景の風景観は、とても意義深い考え方を含んでいます。前の 2 文字は場所性をあらわします。いろいろな場所に注目して変化を楽しみます。雷峰は峰、断橋は橋、南屏は山です。曲院は醸造所で、役人が飲むため

の自前の酒づくり所であり、麹のいい香りがします。風荷は蓮で、これもいい香りです。昨今アロマセラピーが盛んですが、これは香りの風景です。

南屏晩鐘はサウンドスケープです。耳で聞こえる環境のよさ、音の美しさを味わうわけです。柳浪聞鶯は柳の下に波がちゃぷちゃぷ来ていて、そこで鶯が鳴く。本当に鳴きます。初めてのとき、私はどこにスピーカーがついているかと思って探しました。現代日本人はいかに機械文明に汚染されているかということがわかる。ほんとうに本物の鶯が鳴いているのです。十景の風景は全部リアルな風景です。

場所の違い、状況の違い、耳で聞こえる音、目で見る水や魚や鳥の風景、動物も植物も天然の現象です。春夏秋冬も、月も太陽も夕日もそうした情景の全部を味わう。環境のよさのすべてを味わうというのが、八景式、十景式の風景観なんです。

環境のよさを全身で受け止めて画題とし、詩題とする感性がかつての中国人にはあった。それが中国の文化人だったのです。そうしたセンスがなければ科挙の試験は受からなかった。詩歌を詠み、絵を描くのは教養の基本。西湖は詩になり絵になる風景だったのです。その詩や画が数多く日本にもたらされ、それを手本に全国各地に西湖の縮景による大名庭園がつくられたわけです。

私は中国人の優越性を言っているわけではありません。本来、人間は時間つまり歴史を重ねると味わい深い存在になるものです。つまりは、これからの日本のことです。高度成長から低成長になって成熟社会に向うということは、お金はそんなに使わずとも、時間をかけながら環境のすべてを身体で感じ、それを表現していくような社会にしていくべきだと思っています。

実用的な対策に加えて、絵になる風景づくり目指す景観対策も

さて、もう一つは用と景の話です。洪水対策で築堤し、同時に交通対策で両岸をバイパスで直結する蘇堤が、西湖にあります。蘇堤だけでなく、楊公堤も道路に何本もつながっています。内水面漁業があるので、漁師が往来できるようにアーチ橋群もあります。舟運に対し陸路を確保すべく楊柳を植えて緑化対策をし、景観対策として雷峰塔や保俶塔などの塔を建てます。詩題、画題になるには風景が絵になっていないといけません。

あの山の奥に塔が一つ欲しいと思うと、塔をつくるのです。私はその塔までタクシーで行きましたが、昇れません。下から眺めるだけの塔です。それほど効果的に風景をつくろうと考えたのです。

B/C から考えると、眺めるだけの塔を建てるなどありえません。しかし、B/C ばかり言っているからだめだと思います。文化はそういうことをしっかり重ねてやっていくことです。

岡山の藩主池田公は後楽園をつくったとき、正面の操山の中腹に多宝塔をつくらせました。寺もないのに、借景のためだけに多宝塔を建てました。借景が理由です。元々日本人もそういう感性を持っていたのです。西湖堤の縮景が大名庭園のモデルとなり、近代に入ってからさえも大濠公園［福岡市］は西湖をモデルにしました。

自然から学び、理想風景を表現する縮景の手法

日本庭園の特質は、空間、景観、自然、時間という普遍的事項すべてに特色があることです。先づ空間を囲むことによって安全にし、そこに自分だけのマイスペース、ミクロコスモスをつくり安定します。

そして、眺めそのものを庭園の主人公にする借景を工夫します。外部の自然との付き合い方の工夫です。普遍的な時空間をさらに深め、進化させたのが、日本庭園独特の縮景、借景、樹藝、さびです。

今、ジャパニーズガーデンは世界中に普及して、600 近い日本式庭園が世界中にあります。ジャパニーズガーデンは日本で見ればいいのであって、ワシントンやシアトルで見ることはないのですが、そういうことになっています。

日本庭園の技について。例えば縮景では、そこにモデルの大自然を縮めるのですが、それだけではありません。縮景によってあこがれの世界を表現するのです。江戸時代になると、日本の名所や中国の名勝を縮景します。このように神仏世界から日本三景、西湖十景などそれぞれの時代の理想を表すのです。

世界遺産で話題になった富士山の話をします。熊本の藩主細川公のつくった水前寺成趣園［通称：水前寺公園］は、阿蘇の伏流水できれいなわき水のある場所です（写真 3）。

この庭園に富士山の縮景があり、山頂はとがっています。そのため、子供が登れないように後ろに杭を立て鉄条網をめぐらせています。山頂を安息角を超えた鋭角で強調する一方で、本物

写真３　富士山を縮景した水前寺成趣園

の富士山よりなだらかで長いすそ野をつくって省略や強調をしています。

桂離宮には天橋立の縮景があります。本当にそっくりです。写真４のように合わせて見て初めて私も気がつきました。

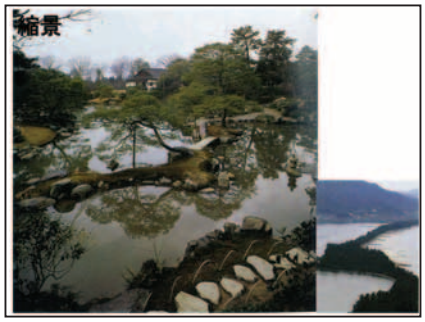


写真４　桂離宮松琴亭前の天の橋立縮景部分

私はこういうのを自然学習性と言っています。人間は何でも自分たち人間が考えるんだと、おごっていますが、ほとんどのことは自然から学んでいるのです。もう一つ、日本人はなかなか優しいと思います。八条宮の妻は丹後宮津の藩主の娘で、彼女のふるさとの風景が天橋立でした。

福岡県柳川にある立花氏庭園の松濤園は、奥州松島の縮景です。クリーク地帯の水を引いて松島の風景をつくっています。

このように日本三景や近江八景は各地で縮景されていますが、その基本は自然から学ぶということです。

相手を生かすために自らを抑える借景技法

借景では、借景対象にほとんど手を加えません。例えば龍安寺の石庭は前景で、本当のメーンは石清水八幡宮という桓武天皇以来の重要な神社の男山を借景して拝む場所です。そのため手前に白い砂を敷いて、遠くの山がコントラストで目立つようにしています。今はマンションが林立しているので樹木でかくしてしまいました。借景は、相手を生かすために自分を抑えることで成り立っています。

借景手法は、相手を生かし、相手を傷つけないでとり込む方法です。中国では、石壁に寿など巨大な朱文字を彫ったりします。日本では、石や木にせいぜい注連縄をめぐらすだけです。自然共生型で、環境を破壊しないでとり込む工夫と言えます。そういうふうにフィジカルにもスピリチュアルにもあわせ配慮している技が日本的特色です。

樹藝と土木技術による修学院離宮と白河南湖開発

修学院離宮の上の茶屋は土木事業と言えるでしょう。後水尾上皇［1596-1680］がつくった庭園です。上皇は「源氏物語」に出てくる平安貴族の船遊びをしたい、そういう時代に戻したいと願っていて、池をつくれと命じたわけです。しかし、池をつくるような場所ではなく、水源は細い滝が２つあるだけですが、その水をためて池をつくります。この上の茶屋の浴龍池は、恐らく徳川幕府の土木集団が頑張って石垣を積んでつくったのでしょう。

もともとの岩盤が龍の背中になるような形でした。その側面を４段の石垣を積みその前に生け垣を植え、ところどころ木を植えた。つまりダム緑化です。この大刈込の樹藝は、今や修学院離宮を代表する大事な風景になっているわけです。この土木は単なる機能、強度を保つだけではなく、まさに美に昇華させ、これこそ土木が誇るべき近世の技術だと私は思います。

もう一つがＮＨＫ大河ドラマ「八重の桜」の舞台、会津に近い福島県の白河についてです。徳川吉宗［1684-1751］の孫、松平定信［1759-1829］は養子に行き白河藩の藩主になります。彼は領地で白河南湖開発をしました。

川をせき止めてダムをつくって、ダムといっても溜め池程度ですが、堤上は松を植えて並木にして土手を築きます。先代の藩主の工事後崩れた箇所の修復もしています。そのときさらに松や紅葉、桜を植えて修景しました。

ダムの目的は当然、農業用水です。新田開発を進め、そのお米を奨学金にして領民教育にあてました。

また、共楽亭という小さなあずまやもつくりました。偕楽、衆楽、後楽は儒教の精神で、政治家は民に先んじて憂い、後れて楽しむと言いますが、松平定信の共楽は共に楽しむです。彼は上段の間、下段の間を設けず、平らな部屋で領民と一緒に話しあったり、楽しんだりしたとされます。もっとも彼はほとんど江戸にいたはずで、それほど頻繁ではないかと思います。

水戸の偕楽園は、徳川斉昭［1800-1860］が自分で楽しむためにつくった大名庭園で、その後何日か開放して市民に利用させたオープンガーデンです。しかし、南湖公園は違います。

南湖公園は、まさしく最初から「公

園」です。セントラルパークは1850年代につくられましたが、南湖はそれより50年前ですから、世界一古い計画公園と自慢してもいいくらいです。

オープンランドな場所に、中国の西湖と同様に水をためて貯水池にし、新田開発をして、それを資金に学校教育を進める。岡山後楽園の津田永忠は閑谷学校の経営で井田法に取り組んで地域の資金が持続するように工夫してもいます。

歴史や自然から学んで景観を造る伝統土木

明治新政府は、江戸時代の大名たちは何もしなかったかのように歴史を書きかえましたが、300年の長い歴史で、その土地に対する投資や防災や殖産振興など、実はそれなりに大変な知恵を発揮していたのです。それを今一度しっかり見直すべきだと思います。

私は、まだ毛沢東が元気なころに中国庭園が見たくて旅行したことがあります。そのとき知って感動したのは、中国の土木局の筆頭研究室が土木史とか河川史など歴史系研究室であったことです。水を治める者が国を治めるという国柄だから、中国はやはり歴史を大事にしているのかなあと思いました。その後の中国にも何度も訪ねていますが、いまは近代一辺倒のようですね。

いづれにせよ日本の工学部はあまり歴史は重視していないのではないでしょうか。建築界も同様でしょう。技術現場ではほとんど役立っていないと思われている。しかし、それは逆です。歴史から現実にしっかりフィードバックすることで、デザインや技術がもっと豊かで深くなるはずだと言いたい。

自然から学んで景観をつくることをあえて伝統土木と言いましたが、近代以前は造園、土木といった分け方はなかったでしょう。その意味では日本人の心にある土や水、石などに対するアニミズム的な心の持ち方は非常に大きな意味をもちます。土木界も「伝統土木の心」をとらえなおしていただいたらと思います。

点景と背景のマッチングで決まる、図と地の関係で見よ

伝統土木に重要なのは、用と景のバランスですが、今度は景を考えてみましょう。景だけとは言いませんが、景という言葉は大事にしたいと思っています。「景」の右に「ノ」を3つ書くと「影」になります。つまりこの字には、光と影の両方の意味があり、全体像が「景」の本義です。常に全体でものを考えるべきだという考え方を示しているのです。

風景で言えば地と図の関係です。背景があって点景がある。グラウンド(背景）とフィギュア（図）の関係で景観は成り立っています。現代のデザイナーは点景、目立つものしか考えない。いい背景をつくるだけで、全体が輝くことはよくあります。それが本当にいい風景づくりの仕事です。

しかし、マスコミは点景や図第一主義で、新聞は図がないと記事にしません。いい背景ができたというのは記事になりません。注目されないと、予算もつきません。しかし、最も大事なのは国土全体の大地をどうすべきかです。そして、どのような事業をすすめるか、それによってどのような落ちついた地域社会がつくれるかです。まちづくりも、風景づくりも同じにチェックできます。

P: 機能的であるか、V: 美しいか、E: 自然と共生しているか、S: 地域らしさがあるか、そしてM: 心を打つかどうか、PVESMがチェックポイントです。

現代土木の問題点は「用」と「強」と「美」のアンバランス

土木事業は国土的スケールに拡大し、巨大になりましたので、周囲に綿密な配慮をする余裕がないのではないかと思っています。だから急ぎ実行するのではなく、もう少し考えながらすすめるといいのではないでしょうか。

実用性、機能性といった「用」が勝ち過ぎて、土木によって都市や農村が激変することを予見できていません。高速道路ができると、みんな喜びますが、それと同時にヒト・モノ・カネすべてが中央へ吸いとられてしまうことはないでしょうか。ドイツのシュトゥットガルトでは、アウトバーンの上部を何百mにも渡り公園緑地にし、地域の分断を防いでいましたし、側面には水を落として浄化し、ビオトープをつくっていました。生物環境や遊び場に少しは配慮するといいのではと思います。

次の問題が「強」です。微地形の発達した日本の風景を、港湾整備や道路整備など巨大なスケールの公共事業が蹂躙しています。そのため場所性や地域性が喪失しているかもしれないと思います。

もう一つ、材料についてです。コンクリート材料は非常に多く使われています。コンクリート工作物一般に単純形で、かつ長大です。そういう人工物

の物量が生活環境に、つまり人間的、生物的な、非常にきめが細かい環境に入ると、すごく違和感が出ます。そのことは土木の方々も承知されていて、何とか緩和しようと、いろいろデザイン的な取り組みをされています。しかし、デザイン的感性が不十分だと思います。

例えば農業土木において、いろいろ配慮して景観対策と称して、農業用水のポンプ場を天守や櫓（やぐら）の形にしているのを私は何ヵ所かで見ました。近くに城があったのかも知れませんが、ポンプ小屋の細いピアの上の城閣風建物は不安定だし、川の堰上に城が突然出てきても、墨俣の一夜城ではあるまいしやりすぎだと、思います。

それから、護岸の巨大コンクリート壁にやたらとペイントで絵を描いているケースがあります。いい絵なら少しは許せますが、とんでもない絵があったり、感性不十分なまま化粧をするのはどうでしょうか。褪色してキタならしくなることをご存知ないのでしょうか。コンクリートは、素材色のままが安全です。コンクリートを汚いと思うからペンキを塗りたくなるのでしょう。

私の経験、PVESMとAの視点でチェック

さて、これからは土木の方々ともつきあいながら私自身がこれまで取り組んできた事例を紹介しつつ、それを通して私の基本的な考え方をお伝えしたいと思います。

私は、用と景を現代的に解釈して、環境デザインのチェックをＰＶＥＳＭとＡの６つの側面で考えています（図表１）。

図表１　私の造園土木的経験

● Physical（機能性）、安全かどうか

私は福井県の足羽川の激特［激甚災害対策特別緊急事業］で［足羽川河川環境整備検討会の］委員長を依頼されました。造園家の私に堤上の桜を伐らせる仕事を任せられたわけです。私は結構まじめで、頼まれたことはしっかりやろうとしました。すると地元は桜を絶対に伐るな、福井市役所も商工会議所も猛反対で大変でした。ここでは洪水対策の基本命題をクリアしつつソメイヨシノ一色の老齢状態を多様性と多層性で持続可能な桜の名所づくりに大転換させ、福井の観光再生方策も提案しました。

● Visual（美観性）、景観効果は

越前海岸の東尋坊は 70 mの断崖ですが、柱状節理という非常に特殊な風景で、国の天然記念物・名勝に指定されています。しかし、その崖上に土産屋などのお店が数多く張り出し、70 mの高さを感じさせません。大自然の凄さを人工物が消去してしまうのです。自然と人工物の対立ゆえです。景観破壊がヒドイので国定公園の指定を外すということになり、県庁からの要請で、崖上の店舗群をセットバックさせようということにしました。しかし、国定公園になる前から土産物屋やレストランをやっている人たちは、今ごろ県が来て何を言っているのか、ということで大変でした。こうして、いろいろな方にヒアリングして２つの案を提案しました。

東尋坊の風景の見せ方を、70 mが 100 mに見えるくらい工夫して雄大にしませんか。あなたの店舗があるので、財産価値が落ちている。一つひとつ説明し、大変な思いをして、とにかく最前列の店舗だけはセットバックしそこに松を植えて利用者の広場をつくりました。一次計画しかできませんでしたが、店舗の前に木を植えスクリーン化と景観対策を実現しました。

● Ecological（生態性）、生き物は生きられるか

熊本県玉名市の小岱山県立自然公園内で、地元の業者が乱開発した土地を、蓮華院奥ノ院というお寺の境内として造園修景し緑地の再生を実施しました。

● Social（社会性）：地域性／時代性、地域らしさを感じられるか

富士山の麓三島市の、三島熔岩の台地できれいなわき水が湧出していた土地ですが、それがどぶ川になってしまいました。そのため、水の復活ときれいな水のプロムナードをつくること。そのとき地場材の採用を考えました。

私は工業製品だと画一的になるので地場材を使おうと言ってきました。ここでは三島熔岩という黒砂石を使うことにしました。護岸や池の形、噴水口を工夫して菰池公園や源兵衛川の親水空間を整備しました。

● Mental Spiritual（精神性）、心からやすらぐことができるか

ふつう土木事業では、スピリチュアルな要因、精神性、までは考えません。

しかし、こころの問題やふるさと文化のことは住民にとって大切なことです。ひとつは、合併前に仲があまりよくなかった地域同士をつなぐ友好のために、日野市では浅川に橋を架けました。旧日野村と旧高幡村は仲よくなりました。他にもいろいろな仕事をしましたが、最近の事例は世田谷区の二子玉川公園に「帰真園」という庭園を監修しました。開発文明に対して、日本文化精神とユニバーサルデザインでバランスをとろうと考えたのです。

● P+V+E+S+M=Amenity（アメニティ）（Total Landscape）

以上のチェックリストを全て充すことが、環境の理想状態で、これを私は「アメニティ」と考えています。Amenity の語源を辿ると amare（=love）に到ります。結論的には、「○○らしさ」の実現が「アメニティ」だと私は考えています。その一例が、長らくつきあってきた川崎市の、多摩川プランです。多摩川エコミュージアム構想と運動以来 20 年くらい取り組んできて着実にすすみました。

以上少しくわしくご紹介します。

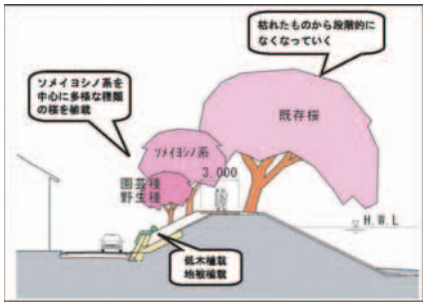
多様性と多層性が、持続可能な植栽の基本

福井市の足羽川の桜は見事です。昭和 27 年（1952）に青年グループが土手の両サイドに植えた桜で、土手そのものがソメイヨシノの並木でした。しかし桜が老いているうえに、その堤防が崩れ、洪水で激特事業が適用されるほど荒れた状態になっていました。

ところが、地元福井市は県と国の仕事である激特事業に消極的、もしくは反対します。桜百選で観光客が来ている名所で、福井市にはこれ以外名所がないとせっぱ詰まった感じでした。しかし、私が見た限り、このソメイヨシノはもう 10 年ほどしか持ちません。だから、10 年先どうするのか、という問題があります。

もう一つ、ソメイヨシノだけで覆われている桜の名所は生態学的には問題があることです。ソメイヨシノはクローンです。一斉に老化してゆくソメイヨシノだけの植栽は多様性植栽に変えなければなりません。そこでモデルにしたのが、本多静六［1866-1952］の手による明治神宮の森です。

私は、既存の桜は間もなく寿命が来るだろうが、元気なものは残すことにしました。ただし、堤体を広げて、そこにたくさんの種類の桜を入れ、樹齢もいろいろ組み合わせることにしました（図表 2）。



図表 2　福井県足羽川堤、多様性植栽の計画

伐る了解を得るために提案した部分もありましたが、新しい時代の永遠に持続可能な桜の名所づくりをテーマにしたわけです。それで、既存の元気な桜は移植し、新しく広げた堤部分に新しい 20 種類以上の桜を植えました。

もう一つ一本々々桜の高さを変えました。多くの桜の名所は、同齢の苗木を一気に植えることです。同齢林で、同一種類を植えるのはいけません。生態学的にはいろいろな種類と、いろいろな高さが混ざって持続的に安定する多様性と多層性が、基本です。

環境アセスメントで必要なのはトータルな視点

熊本県玉名市にある小岱山県立自然公園で、地元の建築会社が破壊的な造成をしました。その後、蓮華院から京都の友人がそこの奥之院の造園を引き受け、私がプランを作成しました。

写真 5　緑化以前（熊本県、蓮華院奥之院）

写真 6　作庭・自然再生後の蓮華院奥之院

写真 5 と写真 6 が事前・事後です。イギリスのレプトン［Humphry Repton　1752-1818］がつくったレッドブックのように、使用前・使用後を並べて見せると造園の意義がよく分かります。

土木の場合のアセスメント［環境影響評価］でも、よくなったアフターを見せられるよう考えることです。

環境アセスメントの仕掛けは、植物、昆虫、魚類、さまざまな専門家による個々の要素データを集めて審査すること。そのため、トータルな環境への評価が疎かになります。私はアセスメン

トの審議会の委員を何十年か務め、つくづくそう思いました。ある審議会委員は、自分の専門のサンショウウオの話しかせず、それ以外は黙っている。これでは、サンショウウオアセスメントで、環境アセスメントとは言えません。こういう専門家を幾ら集めても、審査の結果より良い計画にしてゆくアセスメントにはなりません。

修景事業で必要なのは機能美への配慮

広島県にある下蒲刈島（2003年に呉市に編入）で町長だった竹内弘之［1935-2009］さんは、パワフルなひとで、港湾でも田園の改善でも中小企業振興でも、いろいろなモデル事業を県から取得してくる。この竹内町長と進めたのが、「ガーデンアイランド下蒲刈」です。あらゆる公共事業を組み合わせて最終的に下蒲刈島を「庭園の島」に仕上げるコンセプトです。

江戸時代、広島藩は朝鮮通信使を接待するに際して、城下で事件が起きるのを恐れたのか、下蒲刈島という離れ島で毎日ごちそう攻めに接待しました。江戸城に到着した朝鮮通信使は、もてなしがよかった土地はと聞かれ、“安芸の蒲刈、ごちそう一番”と褒めました。彼らは文芸が達者で、滞在中に下蒲刈八景を選んでいました。そこで私は公共事業を活用する「新下蒲刈八景」を提案。一景ずつ整備し、それらを「美しい島·ガーデンアイランド」のコンセプトでまとめていくことにしました。

新八景の一つ、朝鮮通信使資料館です。私が初めて島に行ったときは、階段状の護岸の雁木が港に残っていただけで、それ以外歴史は何もありませんでした。竹内町長が中心になって頑張り、朝鮮通信使の資料をいろいろ集めたのです。

写真７　ガーデン・アイランド下蒲刈島―荒磯を造景（広島県）

それから、写真７のように、私の先輩造園家の伊藤邦衛さんに依頼して、防潮堤を自然石で積み修景しました。防潮堤の前の石組みで庭園のような風景になりました。こういう修景事業、少しの配慮で、島は美しくなります。

土木界ではこれまで、機能的で丈夫という、用と強を念頭に仕事をされてきました。土木には用、強、美がありますが、美はあまり重視されない。朝鮮通信使資料館前の防潮堤の修景は機能美と言えるかと思います。土木、インフラはすべての国民の目に映っています。国民感覚には安全・安心。さらに、美のセンスも要求されているのです。

帰真園の作庭で日本文化の精神世界を表現

世田谷区の二子玉川にある帰真園［2013年４月竣工］は、私が監修しました。真実や自然に帰る、リターン・トゥー・ネイチャーという意味を込めてネーミングしています。

熊本哲之前区長の提案で、世田谷にも名園と伝えられるような日本庭園をつくりたいとのことで、監修を引き受けました。この場所は昔の二子玉川園という遊園地の跡地で、東急の所有地に都市再開発で高層ビルを建てました。その奥に区立の公園を整備し、その中心施設として帰真園をつくることになりました。

区の教育委員会では、清水建設の昔の副社長の旧宅の部材を保存していました。一方公園予算では、小さな亭榭しか設計されていません。

日本庭園と日本建築はワンセットですから、それではだめ、と言いました。前区長から本格的な日本庭園をと私は頼まれたのです。しかも、世田谷区は「世田谷『日本語』教育特区」の認定を受け、日本語を基本に学校教育ビジョンを組み立ててきました。21世紀の世田谷の子供たちはグローバルに仕事をする。彼らが外国に行ったとき、日本文化を知らないでどうします。教育特区として地方では英語教育を軸にしますが、世田谷区では日本語を、さらには日本語でつくられた日本文化を大切にと、独自の教科書もつくりました。私は教育委員でしたし一章執筆もしました。

日本文化、例えば縁側の話とか、陰翳礼賛の話とか、マンション住まいの子どもたちは、理解できない。縁側はインドアとアウトドアの中間で、何とも言えない両面性を持った空間で、和風建築の独自な空間です。また、庇の内は陰翳礼賛の翳、かげりの空間。体験しないとわからないわけです。世界化する中で日本の茶、華道、庭園、建築といった、日本美を味わせたいわけです。

しかし予算はないという。そこで、社会貢献へのご理解の高い清水建設にお願いに参りました。こうして旧清水邸書院は園内のメインに再建されまし

た。区の文化財にも即指定しました。本当に清水建設株式会社のおかげで、帰真園に生命が吹き込まれたのです。感謝しています。それが写真８です。

写真８　二子玉川の帰真園・旧清水邸書院

桂離宮もそうですが、建物と庭園の関係性が日本庭園には必要です。図と地について先述しました。人工と自然がお互いに関係しあって有機的な空間はできるのです。

何事も今は縦割りですから、都市は建物だけでできてると思ったりしますが、緑地や自然との共存が基本です。

清水建設は、区からの柱以外全部新しくしかも丁寧に復元してくれました。大変な金額です。他にも五島美術館から石灯籠を移設するなど、区民からのもらい物もいろいろで本当に皆さんの力でできたのです。洲浜のゴロタは現地の発生栈を活用しましたし、富士山や多摩川への眺めも上手に活しました。ところで、庭園の意味を考えてみたいと思います。

庭園から再開発の高層ビルが見えます。ビルは文明の、機械文明の象徴です。高さも値段も高い億ションで入居者は便利で快適でしょう。しかし私には何かむなしい。そこに文化としての帰真園がある。画竜点睛です。

出雲大社の遷宮に行ったとき、宮司家の北島さんにご案内いただきました。北島家の床に徳川家達［徳川宗家16代当主　1863-1940］筆の「幽顕」という掛け軸がありました。

幽は精神世界の意味とのことです。顕は現実の政治経済軍事の世界です。国譲りの神話で、大国主命に対して天照大神は、これから顕の世界は大和が、そのかわり幽の世界を出雲が治めてくださいと伝えました。役割分担ですね。事実は国盗りかもしれませんが、国譲りというソフトに変えているし、モノとココロをシェアしようというのです。

知恵があるなあと思いましたし、千家さんと北島さんという２つの宮司家を設けて持続性と安定性をつくっているのもすごいと思いました。また伊勢神宮は20年で遷宮ですから、その度に全部新しくしています。出雲は60年で遷宮ですが、神様を引っ越してから社殿を全部修復した後、再び戻ってもらいます。腐り壊れた木を切ってはめ直したり、カヤをふき直したりします。

両者の経済力の違いでしょうが、ともあれ20年ごとも、60年ごとも両方肯定して持続させる多様性の価値観と日本文化は本当に日本のすばらしさだと思います。一つのやり方がすべて支配している一元論の国は大変だと思います。イスラム原理主義の国家などを見ていると、思いませんか。どちらか勝つまで戦わなければいけないのですから。日本は出雲も大和も並び立ち、相互にシェアし共生するいい国です。

「幽顕」で考えると、再開発ビルは文明の顕です。文化の幽、スピリチュアル世界は帰真園です。ぜひ東京世田谷区の二子玉川公園内から幽と顕を一望してみて下さい。

自然・歴史・文化・教育の総合化で Amenity を具現化

私の仕事で最後に紹介するのは川崎市の多摩川プランです。「川崎」の名は多摩川の崎という説もあります。大田区や世田谷区にも多摩川は流れていますが、私は、多摩川を川崎市民の川として愛しましょうと提案しました。

計画に文化性を出したいと、川崎で育った岡本かの子［1889-1939］の短歌、「多摩川の　清く冷たく　やわらかき　水の心を誰に語らん」を行政計画書の表紙に入れました。阿部川崎市長は多摩川プラン［2006年度策定］をトータルプランと位置づけ、多摩川推進室まで設置して、多摩川と、自然、歴史、文化、教育など市民活動のすべてが参加できるまちづくりムーブメントにしました。堤内地側からのアプローチ街路やサインを育実したり、学校の空きスペースに多摩川ビジターコーナーを設置したり河川敷のバーベキューを整序したりしています。

川については、治水や利水、環境用水などいろいろな言い方をしますが、私はもっとトータルなものだと思っています。その意味で、環境教育、「水辺の楽校」のみならず編笠事件［1914年に川崎市の村民500余名が多摩川築堤のため編笠を着用し、神奈川県庁に大挙して陳情］の歴史研究の人たちも参加しています。

先述のPVESMと、Amenity。安全で便利で、美しく、多様な生き物がいて、地域らしさがあって、ふるさとを感じる。そういうもののすべてがAmenityです。Amenityの語源はlove・愛の意味のamare。究極の環境は愛のある世界というのが私の持論です。

土木の自然共生をめざすための「3P1D」（Philosophy、Policy、Plan、Design）

Philosophy、Policy、Plan、そしてDesignの「3P1D」についてお話します。土木の自然共生には、これらが欠けていると思います。たとえばPlanがないままいきなりDesign即ち事業化するプロジェクトも多い。復旧といって、従前のものを再建するのもそう。復興計画を先づ策定して有効性を考えるべきでしょう。特に巨額な事業ほど、Philosophy、Policy、Planの順に進行しなければなりません。しかもこれに一貫性をもたせなければなりません。

● Philosophy

Philosophy（理念）はコンセプト、しっかりした思想を指します。何のためにやるのか。自然共生社会を目指すための社会資本整備、あるいは美し国への成熟社会のインフラ整備といった理念を持つことです。

● Policy

Policy（政策）はPhilosophyを支えるための国土の保全と利活用への方策メニュー群です。このとき、要求される機能の多面性、事業の波及効果のすべての産業への目配りが大事です。それは地方の農林業までも視野に入れて、それぞれの地域特性を尊重したさまざまなサポート施策メニューであるべきです。

Policyは多方面からの何十何百本を総合的に動かして初めて効果を発揮します。東北の復興事業で言えば、東北地方はほとんど農林漁業地帯で、これが阪神・淡路大震災と全く違う点です。農林漁業地帯をどう復興するか。その基本は土地利活用型産業で、農業や林業です。国土を保全する産業とは、国土を基盤にして生業を保つ農林漁業なんです。従って国土交通省や農林水産省は一体で政策をすすめないと困ると思います。

農業が健全でなければ農地的環境は持続しません。農業が農業生態系という独特の生物多様性をつくっているわけです。ウィルダネス［wilderness 原生自然］だけが自然ではなく、この地方では二次自然・農業生態系重要な役割を果しています。そういうものが連続し一体となって日本の国土全体の生物多様性をつくっています。国土保全とは、国土利活用型産業の保全と育成、健全化、活性化とを一元的にすすめるべきなのです。

● Plan

事業の枠組をあらかじめ決めるのが計画ですが、そのためには計画思想が必要です。いまPlan（計画）で大事なのは、自然的土地利用計画だと思います。ペンシルベニア大学のイアン・マクハーグ教授［Ian L. McHarg, 1920-2001］の著作に『Design with Nature』［1969年刊］があり、私は若いころ、いくつかの国立公園計画づくりにこれを応用しました。

この手法を簡単に言うと、土地の地形、地質、植生、地下水の量、地理データをメッシュ単位に重ね合わせ、丈夫な土地のポテンシャルを把握する。強い土地は開発し人工的土地利用を行い、弱い土地では例えば車道を通す予定を自転車道路にするなどの計画手法です。

鳥取県の大山での計画では、ダイセンキャラボクのような弱い植生がある地域では道路は通さないことに、自然のポテンシャルに合わせて計画を更しました。これまでのゴルフ場やニュータウン計画では自然の開発適正を超えて工事をし、後修復に、高額を投入することがよくありました。

● Design

詳細の材料、寸法意匠を決め施工して形が誕生するまでをDesignとします。Designで大きいのはスケールです。土木の基本的な特性は、ビッグスケールであることと、素材がアーティフィシャル［artificial　人工的］であることです。しかし人間はヒューマンスケールを求めます。スケール感のギャップをどう調和させればいいか課題です。ハードな材料を緑を活用して人間にやさしくすることも課題です。

コンクリート材料のみならず地場材や自然材をもう少し生かすべきです。土木工作物がより環境に融和し、同時にステキと市民感覚で言わせるためです。

また、地場材や自然材を使う技術には地方（ぢかた）技術と言ってその地方独特のものがあります。三島熔岩を積むことができるのはクロボク（黒砂）技術屋で、独自のテクニックが必要です。それぞれの地方の人材、マンパワーをどう使うか、あるいはその技術をどう継承するかにも気配りしなければなりません。

B/Cばかり気にしていると、コストを下げることに汲々として地域にも、人にも、デザインにも思いやりがなくなります。これからの土木事業は、まさに日本文化を育て継承し、美し国日本の風景を創るんだというところまで視野を広げていただきたいと思います。

大造成、中造成、小造成といった規模によって工法の工夫もデザインテク

ニックも変えるべきです。人為的な塗装はひかえコンクリートの素材美で勝負すべく工夫すべきです。

自然的・社会的・文化的な環境の持続性はそれぞれの多様性で

さてここからは、地球レベルのこれからを考えてみます。地球自然（自然的環境）、地球社会（社会的環境）、地球風景（文化的環境）の3つの持続性のためには、それぞれ3つの多様性が不可欠だと私は考えています。

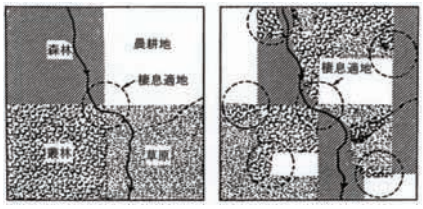
まず第一は誰でも承知していることですが、自然的環境を持続させるにはbiodiversity（生物多様性）が基本だということです。

でも自然的環境が持続しても、人間社会がダメになっては大変ですから、社会的環境を持続させるためのlifestyle diversity（生活多様性）が不可欠だと考えます。これは私の造語ですが、暮らし方、生き方、ほか多言語、多文化の肯定でして、多様な価値観がいいということ、みんな認めようという思想です。

3つ目は文化的環境です。文化的環境が持続するにはlandscape diversity（景観多様性）が不可欠です。工業文明と都市文明が世界中を人工的かつ画一的景観にしてしまい、地方、地域、場所のアイデンティティを喪失させてしまいました。ですから文化の再評価と里山里海湖など文化的景観を保全するなどして景観に地域性を付与すべきです。もちろん文明的な高速道路等インフラ整備で国家の構造まで変えよとは言いません。道路構造は世界共通であるべきです。ただ沿道の環境施設帯に郷土種の樹木を使うことはできます。そういう配慮で景観多様性を育むことはできるでしょう。

生物多様性―日本庭園は美しい本当のビオトープ

もう少し3つの多様性の考え方を掘り下げましょう。まずは生物多様性について。



図表3　土地利用と鳥の生息適地の関係

土地利用が複雑だと生物生息の可能性が高まる（Clark原図）と土地利用形式のちがいと鳥の生息適地の関係を示したのが、図表3です。左右共に同じ面積ですが、左図では一つですが右図は6つの生息適地があります。

工学技術者は環境はシンプルなほうがいいと考えがちで、都市計画でも左図のような土地利用を目指しました。近代的土地利用というものはこういうものだと考えたのです。バナキュラー［vernacula　その土地固有］の、自然発生的集落などでは、すぐれて自然共生的で生物多様性に富む自然的環境が保存され人にとっても好ましい住み場所でした。

ところで私が調査委員会の座長をつとめています明治神宮の森は今年で92年目ですが、造成時いろいろな高さと種類の木を十万本植えました。［1921年の「明治神宮御境内 林苑計画」から］多様性と多層性を意図した植栽は時間と共に成長して安定した森になったのです。自然材料のありがたさで、ここが人工材料との根本的な違いです。

美しい日本庭園にも生物多様性は生きています。龍安寺は石庭ばかりが有名でバイオダイバーシティとは無縁のようですが、そんなことはありません。敷地全体を見てほしいのです。龍安寺は衣笠山を背景に前方に鏡容池を掘り、背山臨水の地にしました。この豊かな土地利用には多様な生物が生きており、その実態を私の研究室で調べたところ、鳥類、両生類、甲殻類、昆虫類など59科90種もの生物の生息が確認されました。生物多様性に富んだ美しいビオトープでもあるのが日本庭園、それが本物の日本庭園というものです。

生活多様性―原三溪に学ぶ多様な価値観と生き方

次に生活多様性について。これは価値観の話です。

明治時代の文明開化は無原則に外国から近代技術を取り入れた時代です。しかし生糸商の原三溪［原富太郎 1868-1939］は横浜市内に三溪園をつくります。この庭園には三重塔など寺院建築を数多く配しています。廃仏毀釈で寺院を壊した時代、原三溪は文化財を守ろうとしたのです。

同時に彼自身日本画の趣味もあり、ここに横山大観［1868-1958］や下村観山［1873-1930］を住まわせて日本画を続けられるようにしています。彼は三溪園の門柱に「遊覧御随意」の看板を架けて、どうぞ誰でもご覧くださいとしました。日本のオープンガーデンの最初です。

これには別の面もあります。実は原三溪は本牧地帯で宅地開発をし、鉄道も通しています。原三溪は新住民たちにレジャー空間として三溪園を遊覧御随意にし、提供したのです。本牧に引っ

越そう、三溪園に自由に入れるしとなります。一方でしっかり実利も考えているわけです。

ここで言いたいことは、時代の潮流に流されないで自分の生き方を大切にしている人物がいたということです。末は博士か大臣かという価値観の中で芸術趣味と実業家で堂々と生きる、生き方の多様性です。もう一つ、オープンガーデンのアイデアがイギリスのナショナル・ガーデン・スキームよりも、三溪園の方が早かったということです。

また、イギリスのナショナル・トラストの設立は 1895 年ですが、日光の保晃会は 1879 年、京都の保勝会は 1881 年設立で、イギリスよりも 10 年以上早かったですし奥州白河の南湖公園はセントラルパークより 50 年も早かった。私は日本の優位性を言いたいのではない。日本の技術や文化についてあまりにも知識も教養もなく、ただ侮っている西洋一辺倒は困ったことだということです。

いろいろな暮らし方、多様な生き方を認める文化が本当の都市であり、日本の都市文化にはそうした伝統も最先端もあったのです。

景観多様性―六本木ヒルズ、遠景か近景かで建築家を選定

3 つ、景観多様性について。

私は、森ビル会長だった森稔［1934-2012］さんの相談にのっていました。六本木ヒルズの屋上田んぼも私の提案です。森さんの本『THE MAKING OF VERTICAL GARDEN CITIES』を読んで、彼の考え方の根本がわかりました。

それまで都市計画中央審議会などで委員として何度もお会いしましたが、とにかく容積率第 1 の人だと思っていました。私は造園家ですから、窓から木が見える高さまでが人間の住むところ、だといって高層住宅否定論から反論しました。

六本木ヒルズの計画が始まって、今までとちがう面白い屋上緑化は何かないかと聞かれ、私が田んぼをつくろうと提案すると、すぐ設計変更しました。自分の提案を受け入れてくれると褒めたくなる。マッカーサー道路［都道環状 2 号線］の植栽計画もアドバイスしました。

本の中に、六本木ヒルズの建物をアメリカ人に依頼するときのエピソードがあります。A さんは当然低層階も設計したいと言うが、森さんは、A さんは遠くから見るとかっこいい建築をつくるからタワーを頼むのだが、低階層は B さんに設計を頼むと言うのです。これはすごい見識だと思います。これが景観多様性の発想です。

遠くから見るとかっこいいタワーをつくる設計者と、低層階の界隈性を大切にしインティメート［intimate 居心地のよい］な空間をつくるのがうまい設計者とを使い分ける。一括発注ではなくて遠景と近景、それぞれにふさわしい設計者を選ぶことこそオーナーの見識というものです。彼は毛利庭園のような日本文化のテイストもつくりました。超モダンに歴史的味わいを付加して魅力づくりを増強したのです。

それから、私はドラマ「チャングムの誓い」と、そのテーマの医食同源の思想が大好きです。私の教え子が「チャングムの誓い」の日本語訳をした縁でドラマを見はじめて感動し、韓国のスタジオにも行きました。

ソウルの郊外は高層マンションばかりですが、敷地の緑化に梨畑を活用しています。なぜ梨畑かわかりますか。「チャングムの誓い」を見ると、梨は健康食材だと分かります。梨は生食ではなく、料理に使うようです。医食同源の思想で何かの病気にいいようです。ドラマも奥深いでしょう。

日本で、緑化というとサツキの大刈り込みとというビルの外構とは大ちがい。結論は景観多様性が大事だということです。神奈川県は昔から立派で相模原や谷戸山、湘南海岸など、原、山、海岸などと、自然環境の豊かな立地に県立公園を配置しています。

3 つの多様性が持続可能性の基本ですが、これからは 3 つの共生、すなわち自然共生・環境共生・地域共生も必要です。生き物とはもちろん、資源エネルギーとも、そして都市と農村、先進国と発展国といった異なる地域同士のお互いの助け合いも必要です。私は『環境市民とまちづくり』（全 3 巻）で、それぞれ 3 つの共生への環境市民たちの具体的取組を紹介しました。

3 段階で土地を読み、地域らしさをデザインする

「多様性からのランドスケープ論」を考え乍ら思ったのは、これまで経済至上主義や画一主義の開発方式を早急に止め、これからは自然や歴史、地域文化、そして市民のアメニティーライフまで全部を絶えず視野に入れた事業展開を考えるべきだということです。

NACS-J［公益財団法人日本自然保護協会］の雑誌「自 然 保 護」（No.534 2013 年 7 月・8 月）に、「このままでいいのか !? 防潮堤計画」という特

集が載りました。防潮堤の高さについては、私も疑問に思います。実際、地域の計画を考えるときには津波という外力だけではなく、太平洋岸地帯の産業や生活、都市と海との関係性などいろいろの側面を見ないといけないと思います。原状への復旧だから、高さを2倍にしておけば安全といったレベルの話はまずい。

ランドスケープの方法では3つの段階があります。空から全体を見るランドスケープ･プランニング(景観計画)、敷地レベルにおりて見るサイト・プランニング（敷地計画)、素材や寸法まで詰めていくランドスケープ・デザイン（造園設計）の3つのレベルです。一般的にはサイト・プランニングから始める場合が多いですが、ほんとうは3段階をしっかり踏まえて多面的に土地を読みトータルな街づくりをしてほしいものです。

自然の保護と開発は調和できる。資源の活用には LMN 法

自然の保全・保護・保存と開発との調和について話します。私は開発は悪い言葉だと思いません。人の能力を開発するのが教育で、土地自然を開発するのが地域開発です。開発イコール破壊というイメージになったのはその方法が不適切だったからです。

適正なスケールとスピードで進めれば､自然を破壊しないで開発できます。巨大な、あるいは短時間で一気に進めて問題を起こしたのです。私はかつて「自然の保護と開発の調和手法の研究」と､『緑からの発想―郷土設計論』[1983年・思考社］の出版で1984年第5回国立公園協会田村賞を受賞しました。

このとき大切なのは自然や地域にはどこにも資源性があるという認識です。この辺には何もないからと思って道路を通すから、道路は直線にできるんです。いかなる場所においても、光を当て、意味づけして、名前をつければ、立派な地域の資源になります。light up（光をあてる)、mean it（意味づける)、name it（名前をつける）によって、資源の発見と活用につなげる。これが、私のLMN法土地のポテンシャル活用法です。

土木の設計施工も、大自然の力によりそって

土木家にとって自然条件は克服すべき阻害要因、クリアすべき条件であって、活用できるメリットではないのでしょうね。自然は活かせるし、調和させれば地域らしさが出たいい事業と評価されるでしょう。設計施工で考えたいのは、コンクリート材料の長大スケール、無機的イメージを立地場所や景観との関連でいかにやわらげるか、です。また持続性のためメンテナンスコストをいかにコントロールするか、です。

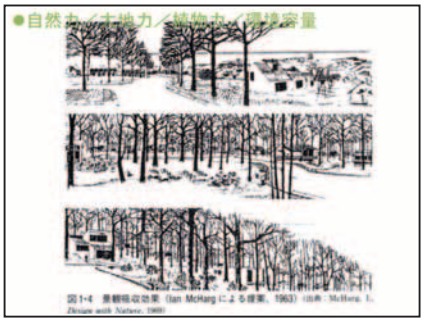
例えば防潮堤は水際最前線に建てることが多いですが、最近はもっと陸地側に建てたほうがいいという考え方が出ています。それは、海岸には自然の生態系、海岸生態系があるからです。防潮効果のみならず、環境全体を持続するコストを考えなければいけないのです。

次に河川は都市にとり重要な座標軸です。自分の居場所、家、わが町がどこかを説明するとき川が目印でしょう。とうきゅう環境浄化財団の機関誌の編集を手伝った際、私は「都市河川座標軸論」を書きました。多摩川を渡って東京へ入ると、帰ってきたなという気になります。橋とか川は本当に大事です。ふるさとを実感させ、ヒートアイランドを防ぎ生命を宿す。誰もが無意識の内にそれに感謝しているのです。国土をもっと構造的にとらえその意味を市民に知らせることが大事です。

河川、海、山林はじめ自然が豊かな風景をつくっています。土木が強大な力があるといっても、自然と同様の風景をつくることはできません。自然力に素直に頭をさげこの自然を生かした土木事業を工夫して、美し国・日本を創っていただきたいと思います。

土木家も植物・植栽の多様な使い方を学ぶべき

人工本位の土木だからこそ、その対極の自然や植物を上手に組み合わせるべきです。一般に人工環境が勝っている場所で植栽を使うときは、前髪を垂らして額の大きさを隠すようなもので、どうしても姑息な使い方になります。



図表4　樹林の景観吸収力

図表4は、マクハーグの『Design with Nature』の挿図です。建物のインパクトを和らげるためのこの効果をランドスケープ・アブソープション［landscape absorption 景観吸収

度］と言います。

コンクリート本体では、素材の美しさを見せればいいし、具合が悪いところは隠せばいい。コンクリートを隠すには、盛土のようなダイナミックな方法と、緑化のような姑息な方法があります。こうした造園手法をもう少し活用して下さい。建築家はこういった効果を上手に利用、建物をつくるとき緑を少し前に置いたり、背景においたり、前後両方に入れて立体化したりしています。

街路樹を8m間隔で並べるだけで土木の方は下手です。樹木はいろいろな使い方ができます。天然の密林、また疎林状、並木状など、いろいろあります。樹木には何百種類もあって個性的素材であり、植え方次第で何百ものバリエーションがつくれます。こうした多様な植栽効果を土木技術で生かさないのは、もったいない。

私の住む南林間という町で、新しく道路の拡幅整備がなされアメリカハナミズキを植えました。隣接ビルはセットバックし、軒並新しくなっている。それだったら沿道の地区計画をセットにすればよかったのにと思いました。大和市行政でも道路は相変わらず道路だけの整備にあけくれ地区計画へ発展させません。

しかも街路樹は日本に合わないアメリカハナミズキで、殆ど元気がないか枯れています。アメリカハナミズキは日本の風土にはなじみません。桜と交換した記念交流でよく使われますが、日本で立派なアメリカハナミズキを私は見たことがない。自然にはその土地に合ったものがあるんです。ヤマボウシの方がずっといいと私は思います。

気になるのは、はたして樹木を自然物だと認識しているのだろうか、ということ。樹形も植え方も8m間隔で設備とみなしている点です。元来生きている植物に同じ高さ、同じ枝張り、同じ形はありません。同寸同種を揃えて植えるのはバロック風の建物がそろっている乾燥地の都市計画ならともかく。日本のでたらめ街並みの下で、生命力旺盛のアジアモンスーン気候では樹木は一本々々自由に伸びるので揃えるのはとても手数がかかるのです。

土木工作物は大自然と拮抗し、大自然を強調できる

土木には大自然と拮抗する力があると思ったのは、先ごろもらった大野美代子さんの作品集を見たときでした。彼女の作品性、デザイン力はすごいと思います。

写真9　（大野美代子氏デザイン）

写真9は彼女の作品集からで、阿蘇の橋ですが、本当に見事です。雄大な自然に、橋だけで十分に対抗しています。むしろ大自然の凄さを引き出してさえいます。これこそ土木力。土木はもっと美と存在感に実力を発揮すべきです。

大東京の都市美ガイドラインを議論したとき、ガントリークレーンの巨大さを評価すべきだと私は考えました。日常のやわな都市世界で、ガントリークレーンの巨大さとパワーが大きな自信を市民に与えてくれる。農地風景などと共々、東京という消費都市の弱さを克服する風景です。

屋根と山を調和させるパラレリズム

青森県の十和田湖町にある蔦川で、伊藤邦衛という私の先輩造園家が火山砂防事業の河川工事に自然の転石を使い、風致的な護岸を施工しました。（写真10）氏は北の丸公園や千鳥ヶ淵もデザインしています。その土地の自然がもつ景観力を生かした事業をもっと積極的に推めていただきたいですね。

写真10　蔦川砂防修景事業
（伊藤邦衛氏の設計監理）

建築家の内藤廣さんは安曇野ちひろ美術館をつくりました。それに先立って現地を訪れた際、棚田で水がとうとうと流れる風景を見て、ここを公園にして美術館をつくるのはとんでもないことだ、と思ったそうです。この自然環境の中で建築をつくるのは容易では

写真11　（内藤廣氏デザイン）

ないと思い、目立たない建物をつくろうと考えたそうです。

私が注目したいのは、屋根のこう配が、背景の山の稜線とパラレルになっていることです（写真 11）。これを景観論ではパラレリズム（平行主義）と言います。これで建築は山の背景一体化し、周囲に馴じみます。いやらしい存在感がなくなり、相乗効果（シナジー）を発揮します。

向井潤吉［1901-1995］さんの農家の絵も、ヨーロッパのスイスの風景もそうです。屋根こう配と後ろの背景の山の稜線を平行にするだけで調和します。もっとも、この間内藤さんにそれを狙ったのかと伺ったら偶然ですと言っていました。

植生への配慮を活かした高架道路のデザイン

赤坂溜池の交差点部分では高速道路の橋体に曲面のスリットやピアのディテールに曲線を取り入れるなど工夫しています。

前出の大野美代子さんの横浜市内、陣ケ下高架橋デザインに注目したいと思います。

写真 12　（大野美代子氏デザイン）

写真 12 がそれです。、キノコのような橋脚で支えています。上下 4 車線の広幅員にするには地盤のこう配がきついので、上下分離にしています。上下線の間には既存木を残して自然とも調和させ、また自然の破壊も防いでいます。林床まで光が入る環境ですと、半陽性と半陰性の植物はが育つことができます。上下線の間をあけないで埋めてしまうと、暗くて植物は生えずエロージョン［erosion　浸食］を起すでしょう。が上下線の間に緑が見えると走行車に優しい道路になる。

ただ、上下線の高さをそろえなければいけないのかどうか。すり合わせが困るのかもしれないが、下の方が低ければ林床にもっと光も入るし、植生も多様になる。また、走行中の視野も広がって楽しい道路になるのではと思います。

型枠は苦労されたでしょうが、植生への気配りがデザインに生かされ、きれいな優しい線とか、自然の傾斜に沿ったデザインが実践されているのはすばらしい。既に私の提案が実現されている好例です。

日本の伝統と美意識をもっと土木の世界で使ってほしい

造園家伊藤邦衛さんが新宿角筈の旧都電敷を四季の道と名づけた緑道にしました。かつては飲み屋街の間を走る狭い電車道でした。左右、上下に視線を変化させるために写真 13 のように

写真 13　新宿四季の道（伊藤邦衛デザイン）

一部地盤を掘り下げ、橋をわざわざかけ植栽地と歩行者を立体分離しています。雨水や落ち葉は下の地面に落ちます。

道路を表わすエジプト文字は横 2 本のラインに 2 本の木が描かれています。樹木の植わっていない道は道でないのです。もうひとつ、道と路は違うのです。現代には路がない。伝統力を持った路のデザインを考えたいと思います。

写真 14　路地（井上卓之デザイン）

路に雨冠をつけると、路地は茶庭の露地になり、日本庭園では道すがらを演出します。写真 14 の右は、茶室の露地ですが、それを家と家の狭い路地に応用したのが、左です。こんな狭いスペースにも凛とした美しさをつくることができる。これが日本の美意識です。こうした美意識をぜひ土木の世界でもっと使ってほしいと私は思っています。

写真 15　静岡県袋井市の中新田命山

静岡県袋井市にある命山は、津波や洪水時に避難するために江戸時代につ

くられた築山です（写真 15）。防災の造形美、これも伝統の知恵です。

エイジングの美は素材のよさを生かすことにある

写真 16 は東京農大のすぐ裏の石垣で、多摩川ごろた石の玉石積です。多摩川流域に広汎に見られます。玉石は時間をかけて味わいが出、エイジングの美と、多摩川流域という場所性や地域性を感じさせます。

写真 16　地域らしさを感じさせる
多摩川ゴロタによる石積

こうした自然材、地場材を人工都市に入れることで、都市文明を地域文化で味つけできます。近年の都市はコンクリート二次製品で覆い尽してしまっています。私は全部を自然材や地場材にとは言いませんが、それらを生かすバランス感覚は欲しいと思っています。

河川や高架下のコンクリートにペンキで絵を描いているのをみます。子供たちの、素朴派の絵ののどかさがあり、絵は悪くないです。しかし、基本的にコンクリートへのペインティングは素材を殺す気がします。エイジングの美は、素材のよさを生かすことにあります。

この講演会場イイノホールの向かい側の日比谷公園は、明治 36 年（1903）につくられた洋風公園です。その外構を東京都が道路を石組みのようにしました。しかし、公園の洋風のスタイルに、石組みの和のスタイルが入り、しかもその石組みがなっていないので、変な感じがするわけです。日比谷公園には日本中の郷土木を入れたコーナーがあり、その影響もあってこうしたのか、とも思います。また、今はユニバーサルデザインなど、いろいろハンディキャップに対する配慮があってのことかもしれません。しかし、霞ヶ関の顔にしてはいかがかと思います。

建築も土木も造園も垣根を越えて環境デザインでつながろう

建築は用と美、土木は用と強と美、造園は用と景が、デザインの原則です。そして、家並み、街並み、水辺（みずのべ）、山並み、そして遙かな海へと、個から全体へ広げていくのが環境デザインです。

ランドスケープの、ランドは土地・自然のこと、スケープは端から端まで全てで全体・総合ということです。家だけ、橋だけ考えることなく、家と庭を、また川と橋それに道と並木をワンセットで構想すべきです。建築も土木も造園もつながってこそ一つの風景になります。つながり感を忘れてはなりません。

このことに気がついて半世紀前トータルデザインを志向。建築では建築デザインから urban design へ、土木では civic design へと言い、造園は landscape design と言ってきました。それぞれウエイトは建物、土木技術、植栽技術に置いているかもしれません。

しかし、これからは最終的に仕上ったひとまとまりのトータル・ランドスケープの質的向上を目指したいものです。建築も土木も造園も垣根を越えて環境デザインとしてつなげることで、「美（うま）し国（くに）」をつくりましょう。みんなで「美（うま）し」と大和言葉でいうような日本の美を醸成しましょう。世界的な都市間競争時代を迎える今勝ち残るには文明的風景を止め文化的風景を醸成しなければなりません。

日比谷公園は文明開化から 110 年たちます。しかし「西洋式」ではありません。「日本化した洋風公園」でした。幕の内弁当のように何でもありの日本的公園です。この和魂洋才のよさがあって、大勢の人に親しまれているのです。

日比谷公園には、市民が 10 万円だすと自分のメッセージをプレートに付けたベンチを寄付できる「思い出ベンチ」が 200 基ほどあります。ぜひお帰りの節日比谷公園に寄って、思い出ベンチに座ってみてください。そして、ベンチの背中に貼ってあるメッセージを読んでください。公園がこんなにも愛されているということを実感できます。

ぜひ安全な土木から安心な土木へ、そして愛される土木へとすすめていただければ幸いです。